sousei akita

曹青秋田

秋田名「佛」 ～15教区久昌寺（赤石副会長御自坊）の佛様～

本尊：釈迦牟尼如来 正徳4（1714）年銘

秋葉三尺坊

木造五大尊 宝永5（1708）年銘

仁王像 宝永7（1710）年銘

会長インタビュー

二月五日に行なわれた代議員会に先立ち、中村会長にインタビューさせて頂きました。

（聞き手：佐々木耕志）

――今日は宜しくお願い致します。まずは任期前半を終えての感想をお聞かせ下さい。

「昨春の就任に当たって〝今期は特定のテーマは設けずに、《弁道会》・《随聞会》・《住職学研修》を通して、多方面にわたって研鑽を積んでいきたい〟と宣言しました。この三本柱を達成していく事が、自分の中では会長としての最低ラインでした。お陰さまで弁道会・随聞会とも盛会裡に幕を閉じ、現在は住職学研修に向けて鋭意準備中です（注：住職学研修は三月九日に行なわれた）。ただ、それ以外の面では、やりたい事を思ったようには達成できていない現状を歯痒く感じています。

檀務を抱えながら重責を全うされてきた歴代会長諸老師に、改めて深い敬意を表するばかりです」

――昨期は副会長として、例えば東北大会に深く関わってこられました。その後に会長職に任じられたわけですが、副会長時代とどのような点で違っていますか？

「東北大会では、実際に動いてくれたのは会長や事務局長をはじめとする各部会の皆さんでした。私にとっては正直なところ、〝始まったら終わっていた〟というのが本音です。

また、お隣の岩手県における東日本大震災物故者慰霊行事や、全曹青・秋田県宗務所様との関連行事など、副会長時代とは比較にならないほど深く関わるようになり、責任の大きさを痛感しています。

会長は秋曹青の顔であり、執行責任者でもあります。これを任されたという事は、会員の皆様から深く信頼されていればこそだと思っております。副会長時代のような気持ではいけないと、今後とも己を律して務めていこうと肝に銘じています」

――《チーム卓道》である役員・事務局員へメッセージをお願いします。

「副会長はじめ事務局長・各部長及び部員の皆様は、現在の秋曹青の中で私が考え得るベストメンバーを揃えられたと自負しております。組織の長としての私が、任命責任を取らなければならないような方は一人もおりません（笑）。秋曹青の事業に、今まで以上にお力添え頂けるよう熱望します!!」

――任期後半である来年度へ向けての抱負・意気込みをお願いします。

「初めに申し上げたように、今年度はやらなければならない事が意外に多く、もっと行動力を示していかなければならないと感じました。来年度は全会員の先頭に立って、皆が後に続いてくれるよう頑張っていきたいと思います」

――最後に、一般会員へのメッセージをお願いします。

「就任の御挨拶でも述べましたが、私は代議員の経験がありません。そのため、青年会は自分にとって縁遠いものだと思っておりました。しかし、縁あって会長職を仰せつかり、新たなる御縁と、僧侶として生きていくうえでの糧を得られました。感謝してもし切れません。私も含め、全会員は檀務の傍ら活動している以上、会の活動になかなか参加できない方も大勢いらっしゃるかと存じます。それでも、思い切って身を投じてみてほしい。僧侶としての成長につながる〝何か〟を得られると思います。そして私と共に、僧侶としての自分自身を高めていきましょう。今後ともどうぞ宜しくお願い致します」

先輩に聴く

寺院実務研修にて唯識の講義をされている、横手市洞雲寺御住職・柴田康裕老師よりお話を伺いました。

（聞き手：菊地大樹＆戎谷周平）

――唯識を学ぶようになったきっかけを教えてください。

平成八年の随聞会の時に、太田久紀先生が講師として秋田市に来られました。そこで初めて唯識の講義を聴きました。それまでは唯識に触れる機会がありませんでしたが、その講義を聴いてすっかり唯識にはまりました。

――唯識の魅力とは？

道元禅師のお言葉に「正師を得ざれば学ばざるに如かず」（『学道用心集』）があります。自分のことを考えた時に、〝自分にとっての正師とは何か〟という疑問と、〝身近に師匠がいない自分は、いくら勉強しても無駄ではないか〟という不安がありました。太田先生のご講義の中で、〝たとえ間違っていても、とにかく勉強を続けなさい。それは正しい教えにはならないけれども、それを助ける《助縁》（増上縁）になる〟という一言によって、自分が抱いていた疑問や不安が解決されました。

『正法眼蔵』は仏様の立場から説かれているので、実に高尚ではありますが、自分には中々納得できるところが少ないように感じていました。一方、唯識は凡夫の立場で説かれているので、現実の自分にとって非常に親密に感じ、納得できるところが多いように思います。おのれの中に潜む汚い心というものに目を向けて学ぶ姿勢が、自分にはしっくりきたのです。

――唯識はどうしても難解に思えますが…

唯識は言葉の羅列のようなところがあって、始めは面倒に思えます。言葉に慣れるまでは大変ですが、言葉に触れていくことで見えてくる部分もあります。最終的には言葉を超えなければいけないでしょうが、ある程度は言葉に頼らなければ、教理から離れてしまいます。だから言葉は大切なのです。慣れてくると苦ではなくなるので、長い眼で見て、続けて勉強していくことが大切だと思います。

――唯識を実生活においてどのように役立てたらいいですか？

唯識では「善」や「煩悩」について明確に説かれています。それに照らし合わせていけば、自分の心の状態を客観的に観察することができます。つまり、自分がどのような道を歩んでいくか考えた時に、具体的な目標ができるとともに、修行がし易くなると考えます。常に道元禅師様の清規に則った生活ができていれば、どんな心が起きようと、それは仏道に適ったことになるでしょう。しかし、現実の我々の生活（ドロドロな俗世の中）において仏道修行するためには、明確な目標や、客観的に自分の心をチェックすることができるようなチェックシートが必要だと思うのです。「煩悩」が何か解らないまま、「煩悩即菩提」などと言ってしまいますと、大きな間違いを犯すことにもなりかねません。ただ漠然としてではなく、「煩悩とは何か」ということを、具体的に知ることが必要だと思います。

唯識には道元禅師の清規のような具体的な「行」が説かれていません。そこで、唯識を勉強しながら、どうしても坐禅の実践が必要なのです。坐禅は「南無帰依仏」の実践だと思います。自分にとって、坐禅を行じている時と、唯識を勉強している時だけは、唯一「南無」の実践であると感じています。

――青年会員へのメッセージをお願いします。

社会的な活動（ボランティアなど）が非常に熱心だと感心しています。僧侶としても大事なことだと思います。それと並行して、古典や祖録などの勉強は必要不可欠です。今が一番勉強に適した時期だと思います。学生の時には解らなくても、修行を経てから古典や祖録に触れると、また違った見方ができます。時間がある今のうちに、地道な勉強をしておくことは、きっと将来に繋がるものと信じています。

～康裕老師お勧めの本～

太田久紀
『凡夫が凡夫に呼びかける唯識』
（大法輪閣）

『唯識三十頌要講』『成唯識論要講』
（中山書房仏書林）

「随聞会」に参加して

六教区　長泉寺副住職　戸澤広悦

去る十一月二十七日、秋田ビューホテルを会場とし、福島県昌建寺御住職・秋央文老師を講師としてお迎えした、平成二十七年度随聞会に参加いたしました。

当日は、強風による悪天候の中ではありましたが、多数の会員が参集し、実りある研鑽を積むことが出来ました。

冒頭、老師から「青年会員の皆様とは年齢が近いので、一方的に話を聞いて頂くのではなく、皆様方のご意見、お考えを述べて頂きながら進めていきたい」というお話がありました。

二時間という限られた時間ではありましたが、「没後作僧」や「直葬」に関する問題意識の共有、解決するための様々な考え等々、私達宗侶の立ち位置を、参加者各々、改めて考える事が出来たと感じております。

「これからは、寺院云々ではなく、私達宗侶一人一人の資質が問われる時代となってくる」というお言葉に、檀務だけではなく、日常生活そのものを、宗侶として意識しながら送っていこうと考えられる、大変良い機会となりました。

住職学研修に参加して

今回の住職学研修は三月九日、宗務所にて「寺院における毛筆体の実際」というテーマで、能代市倫勝寺御住職・山田晃一老師に講義して頂いた。老師は大学生の時から書道を本格的に始められ、現在は「欅庵」という雅号で活躍され、様々な書道展で評議員や審査委員をされている。

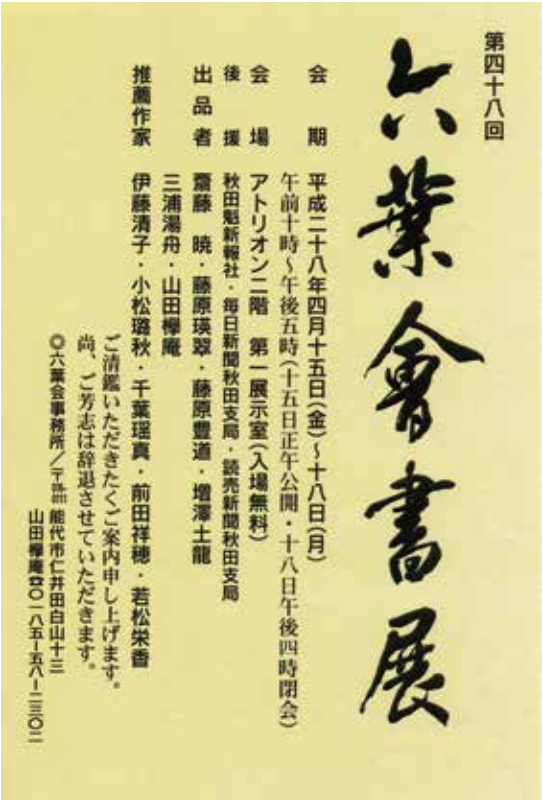
講義の前半は、老師自らが書かれた戒名紙・塔婆・可漏・法語等を参考に話された。老師は〝戒名紙や塔婆を書く時、ただうまく書くというよりは、運筆を大事にして勢いのある字を書き、余白とのバランスをよく考えたほうがいい。また、たくさん書くことも大切だが、書の先生に習って朱の一筆を入れてもらうだけで、上達度がかなり違う〟とおっしゃった。檀家さんのお宅での法事の時は、筆を用意してもらい、故人の話をしながら塔婆を書くという師の姿勢に驚かされた。

後半は小筆で戒名紙を書き、臨書（手本を見ながら字を書く事）して、最後にもう一度戒名紙を書くという実践を行なった。臨書には書聖・王羲之（三〇七頃～三六五頃）や、楷書の四大家の一人である欧陽詢（五五七～六四一）の書を用いた。〝字がうまくなるための一番の近道は、先人の字を何度も真似て書き、自分の中で気づきの一本を見つけることの繰り返しが大事で、これは書道だけでなく仏道にも通ずる〟と老師は述べられた。

老師の御本師は毎日二十枚、書の先生は毎日百枚も臨書されていたことに、深く感銘を受けた。また、大家の字を真似ても、線質も形も同じように書けず、非常に難しいと感じた。

塔婆をはじめ、自分が書いた物を檀家さんが目にする機会は多い。上手・下手は見る人によって変わると思うが、自分らしい味のある字を書きたい。そのためにも臨書するなど、平生の中で筆を使う時間を増やし、良い線が書けるようになることが大切だと改めて実感した。このような実践的で良い刺激を受ける研修をして頂いたことに感謝し、日々精進していきたい。

（戎谷周平　記）



書籍紹介①

木村隆徳『なるほど仏教 禅の法話に学ぶ』

（誠信書房）

本書は、山口県萩市・海潮寺の住持職を務める木村隆徳師が、二十年以上にわたって檀家さんの為に毎月書き続けてきた法話を、テーマ別に分類して収録したものである。師はまえがきで、現代の宗門僧侶の布教について次のように述べる。

〝お檀家さんたちの数を増やすのが布教なのではなくて、お檀家さんたちに佛教のことをより多く知っていただき、少しでも質を深めていただくために住職が努力するというのが、日本の現状にあった布教ではないかと思います。〟

師はこのような理念に基づき、実用化して間もない頃の日本語ワープロで法話を書いて、月参りの時に檀家さんに配り始めた。今ではホームページも開設して、毎月新しい法話を載せ続けている（注：本書が刊行された平成十七年春現在）。さて本書に収録されている法話の内容であるが、道元禅師の【同事】【修証一等】の解説から、テレビ番組などの身近な話題まで実に幅広い。例えば第四章「自然」では、白菜を収穫せずに越冬させると、根のデンプンを分解して糖分に変え、葉に行き渡らせて枯れにくくさせるため、非常に糖度の高い甘い白菜ができる――というテレビ番組の紹介から、目に見えない自然の力を粘り強く引き出す日本人の自然観を語る。次に第五章「科学」では、モンゴルの遊牧民の古老が、羊の天敵である狼を敢えて全部は退治せず、伝染病にかかって弱った羊を食べてくれる大事な存在としている話から、〝部分の死が全体の生を支える〟生態系の神秘を語る一方、自らの生存のために個体もろとも滅ぼす癌細胞を現代の風潮に例えている。ともすれば平板な説教になりがちな具体例をうまく結び付けて読み手に深く考えさせる、味わい深い法話となっている。

また、第八章「道元禅」では次の法話が特に興味深かった。まず〝暑い時に扇を使うと風が起こって涼しいが、使うのをやめた途端にまた暑くなる〟と当たり前の現象を述べる。そしてそこから〝人は本来佛性を具えているので修行すれば安らか（＝悟りの状態）であるが、修行をやめた途端にそうではなくなってしまう。だから悟りとは到達点ではなく、真剣に修行を続けている状態そのものを指すのだ〟――と、道元禅師の【修証一等】を分かり易く解説する。学問的な正確さも追求したこの法話は、木村師ならではのものだろう。

佛教では相手に応じて法を説くことを「対機説法」というが、本書はまさにそれを地でいくものといえる。社会構造が激変するなか、葬儀・法要・墓地など従来の寺院基盤の必要性が、現代では鋭く問い直されている。声高に改革を唱える声も多いが、「檀信徒への法話」という教化の基本を地道に実践し続ける木村師の姿勢は、見落としてはならない大切なものを我々に教えてくれる。

（佐々木耕志）

書籍紹介②

くさか里樹『クマーラジーヴァ』

（潮出版社 KIBO COMICS、全八巻）

〝TV番組制作会社のカメラマン・東太郎は、シルクロード取材中に砂嵐に遭い、撮影を強行しようと仲間の制止を振り切り車外に出るが、「羅什（鳩摩羅什）」という人物を狙う一軍に遭遇。混乱状態の中を青年僧に救われる。自分を砂嵐から救ってくれた僧こそが鳩摩羅什だと知った太郎は、彼の足跡を追いかけはじめる。〟（単行本一巻の前書きより）

鳩摩羅什（三四四～四一三、または三五〇～四〇九）は〝史上最高の訳僧〟と称される。宗門では現在も羅什が翻訳した『般若心経』『妙法蓮華経』『金剛般若経』を読誦しているし、浄土真宗では『阿弥陀経』を現在も読誦する。また、特に有名なものだけでも『大品般若経』『維摩経』『中論』『大智度論』があり、中国・朝鮮・日本の佛教は羅什の翻訳が基礎となっているのである。

このように偉大な人物だった羅什はしかし、優秀過ぎたが故に時代と権力に翻弄され続けた。父・鳩摩羅炎は徳の高い僧侶だったが、シルクロードの要衝にあった亀茲国王の妹・耆婆の猛アタックを受け、還俗して結婚した。その為に羅什は〝破戒僧の子〟という中傷を受け続ける事になる。また、教学以外にもあらゆる学問に精通して名声の高かった羅什を、前秦国の王・苻堅は参謀として召抱えようと、大軍を送った。亀茲国王は羅什の進言を聞かずに徹底抗戦して敗れた。さらに占領者である将軍・呂光は「そなたの節操は父以上ではないだろう？」と無理やり酒を飲ませ、亀茲国王の娘と密室に閉じ込めて、契るよう強要したのである。己のために多くの血が流れ、粗野な荒くれ者に破戒を強いられた苦悩は、いかばかりであったろう。

作者・くさか里樹氏は漫画家として三十五年以上のキャリアを持つベテランである。氏は羅什の魅力について次のように語っている。

〝知れば知るほどに魅力的な人物であり、やがて惚れ込み、その惚れ込んだ人物を描ける幸せが漫画家の醍醐味です。（中略）できることなら太郎のようにトリップして、実際に…会ってみたくてたまらなくなります。〟

氏は本作において、太郎と相棒のアイドル・COCOの二人を羅什の時代にタイムスリップさせて一緒に旅をさせる。他にもキャラの立った人物を多数登場させ、時空を超えて彼らの役割を繋ぎ合わせる。特に秀逸なのは次の点だ。まず母の愛を受けずに育った太郎と、罪悪感に苦しんで子を愛せない耆婆・その母の愛を求める羅什を二重写しにさせる。また、自暴自棄で世の中を恨んでいた頃の太郎と、出世のために家族を殺して誰にも心を許さない孤独な呂光を二重写しにさせる。そして、挫けそうになる羅什に対しては勿論、冷酷な呂光が改心するうえでも、太郎は重要な役割を果たすのである。このような手法は漫画だからこそ可能であり、ベテラン漫画家くさか氏オリジナルの、唯一無二の歴史ファンタジーといえる。

ややネタバレの紹介となってしまったが、是非ともお読み頂きたい。鳩摩羅什の偉大さのみならず、漫画の持つ無限の可能性をも再確認できるに違いない。

（佐々木耕志）

曹青秋田／第80号
発行／秋田県曹洞宗青年会
事務局／秋田市寺内神屋敷11の6 西来院内　発行責任者／中村卓道　編集責任者／菊地大樹
秋曹青ホームページ　http://www.sousei-akita.net/